

## 1 トウニン末

## 2 定量法の項を次のように改める。

3 定量法 本品約0.5 gを精密に量り、薄めたメタノール(9→10)  
4 40 mLを加え、直ちに還流冷却器を付けて30分間加熱し、冷  
5 後、ろ過し、薄めたメタノール(9→10)を加えて正確に50  
6 mLとする。この液5 mLを正確に量り、水を加えて正確に10  
7 mLとした後、試料溶液とする。別に定量用アミグダリン約  
8 10 mgを精密に量り、薄めたメタノール(1→2)に溶かして正  
9 確に50 mLとし、標準溶液とする。試料溶液及び標準溶液10  
10  $\mu\text{L}$ ずつを正確にとり、次の条件で液体クロマトグラフィー  
11 〈2.01〉により試験を行い、それぞれの液のアミグダリンの  
12 ピーク面積 $A_T$ 及び $A_S$ を測定する。

13 アミグダリンの量(mg) =  $M_S \times A_T / A_S \times 2$

14  $M_S$  : 定量用アミグダリンの秤取量(mg)

## 15 試験条件

16 検出器 : 紫外吸光光度計(測定波長 : 210 nm)

17 カラム : 内径4.6 mm, 長さ15 cmのステンレス管に5  
18  $\mu\text{m}$ の液体クロマトグラフィー用オクタデシルシリル  
19 化シリカゲルを充填する。

20 カラム温度 : 45°C付近の一定温度

21 移動相 : 0.05 mol/Lリン酸二水素ナトリウム試液/メタ  
22 ノール混液(5 : 1)

23 流量 : アミグダリンの保持時間が約12分になるように調  
24 整する。

## 25 システム適合性

26 システムの性能 : 標準溶液10  $\mu\text{L}$ につき、上記の条件で  
27 操作するとき、アミグダリンのピークの理論段数及び  
28 シンメトリー係数は、それぞれ5000段以上、1.5以下  
29 である。

30 システムの再現性 : 標準溶液10  $\mu\text{L}$ につき、上記の条件  
31 で試験を6回繰り返すとき、アミグダリンのピーク面  
32 積の相対標準偏差は1.5%以下である。

33